

テーマ「東日本大震災とアート」

石巻市アトリエ・コパン主宰新妻健悦氏に聞く

聞き手 立原慶一（本学会会長）2011.10.25

聞き手 第50回大学美術教育学会（於・宮城教育大学）のシンポジウム「美術教育、ゼロからの出発」でフロアーから、大震災の体験後においてアートの意味をどのように捉えるようになったか、との問いかけがありました。この質問に対して新妻先生はそれに答えられるほど、今（平成23年9月24日）はまとまっていないと語られました。今、質問に対してどのように答えられるでしょうか。

新妻 普段私たちは程良い人間関係の中で暮らし、相互に無関心で深く立ち入らない距離をとって、生活していました。しかし震災後は、みんなが「密」にギュッと繋がりました。生命や生活を保つためです。避難所がそうですが、これまでのような自由はありません。それぞれが勝手な方向に動いていた以前の状態から、どの人も同じ方向に向かって、秩序を生み出したのです。道で出会う見知らぬ人どうしは互いに声を出して挨拶を交わし、自前で始めた炊き出し所での共同作業も一体感を作ってまとめ、自然発生的に人々が密につながる、「コミュニティ」が形成されていきました。

振り返れば、私たちの日常は衣食住が保障され、行動も思考も時間帯も自由な環境で成立していました。人との関係もゆるい繋がりで、アーティストはそのような日常が恒常化する中で、非日常的世界を求めていたのかも知れませんね。ところが被災当時の密な人間関係の場に、アートが被災地支援という形で持ち込まれた時には、正直違和感を覚えました。被災者である私たちにとっては、あたかも別世界の人間がやってきた感がありました。以前の日常が奪われ非日常と化した被災地に、支援と言って、アートの持つ非日常的世界をまるで宅急便のように運んでくることに、ミスマッチを感じたのです。被災者は、ほんのちょっとした日常を望んでいて、温かいおにぎり一個にも涙したほどです。「アートは果たして、密な人との場に入り込めるのか？」の問があるとすれば、答えは否ですね。被災者になって改めて気づいた点で、基本的に「アート活動は日常が保障されて成立する」と思います。

現代人は相互不可侵の人間関係に居心地の良さを見つけますが、人との隙間—「間」が大事になっていますね。「間」にどんどん入り込んでくると傍若無人な奴となり、「間」が希薄になると孤立感や疎外感を感じ不安になります。アートはその「間」に位置するのかもしれない。アートの表現者はアートを介して人と繋がり、同時に社会的な存在者としての立場を顕在化させます。それは社会に対してメッセージを発信する立場です。それに対して内向的に、探索的に制作をするアーティストの立場があります。彼らは自分の内に向かって表現をしますが、それでもどこか人を繋ぐ「間」に向かって、無自覚的に発信しているようにも見えます。これまで教育の場では「アートはどこに、誰に

向かっているのか」については不問にされ、先生は「自分の思ったようにやってね」と言いつつ、周囲に伝達可能な表現内容を期待していました。つまり「個の立場」と、「社会的立場」が混然としていたと思います。それが昨今のグローバル化の影響でしょうか、表現のコンセプトを明確にして、アピールする力が要請されていますね。受け手を意識し、「個」から「社会」へのスタンスが強まっています。軽々には言えませんが、元々、この国では歴史的経緯もあって「表現を何処に向けるのか」を強く意識化することは、薄かったと思います。人との「間」が文化の醸成に関わり、そのワンクッションとしての「間」に、アートを発信する土壌が想定されるからです。つまり人との「間」に、敏感な文化圏を形成して来たのでしょうかね。その「間」で、アートの自律性が歴史的にも、保持されたのかなあと。私は被災の体験をしたことで、「間」について注目するようになりました。

聞き手 被災地にとってアート支援とは一体、何であり何であったのでしょうか。

新妻 アート（美術）支援者は被災者に元気になってほしい、との一念で訪れます。とてもありがたく敬意と感謝を申し上げます。しかし被災の程度にも段階があり、支援活動に受け手として参加できるのは、「描く・作る」が好きで、そのことが日常行為となっていた子どもや比較的元気な子どもたちで、内向的な子どもや精神的ストレスを抱えている子が、参加することは稀です。そもそも初めて出会う支援者に、易々と心を開くものではありませんよ。人との関係構築がまずは前提となるでしょうね。またワークショップ等で、美術的なアクションを要求することは子どもに負荷をかけることであり、シナリオどおりにはいきません。本来、地元には幼稚園も学校でも当然ですが、先生がいて子どもたちと信頼関係を築いています。彼らを差し置いての「一回性の支援活動」には疑問を感じます。それから支援場所となる避難所、仮設住宅、学校、幼稚園等の施設がありますが、先生や関係者は連日、日常を取り戻す仕事に追われていて、アート支援者のお世話をする余裕はなく、それでも断り切れずに二重三重の負担となって、難渋していますよ。被災の状況はもっと斟酌されるべきですね。

それから被災後の復旧段階、経過期間、それに連動する家族の境遇に配慮した支援のプログラム、その質、その在り方が問われていくと思います。基本的には、生活の柱となる家庭や親の状況に対しての支援こそが第一で、経済的に少しでも再生することが重要です。今後は、アート支援も段階ごとに効果の妥当性が自画自賛となることなく検証され、全体を総括した上で支援システムの在り方を研究する必要があるでしょうね。また学校との連携も欠かせないと思います。一方では、海外からもメンタルなケアを目的とするチームが来訪していますが、日本的（東北）な「間」の文化や、感情表現その他についてもはたして合致するのか、国際的な比較検討がなされるといいですね。

それから私の中で、ぼんやりしていたアート（美術）支援の行き先ですが、少し明らかになりました。従来から、子どもの表現は子ども対親の関係から、子ども対家族、次

に子ども対先生、そして子ども対級友と広がり、「個」対「社会」となる構図を描いてきました。先生は子どもに社会的な人間として機能するようにと、国語や算数などの学習を課しますが、図画工作もその流れの中に組み込まれていますね。子どもにとって先生は社会の規範を体現する、「社会の側」の入り口に存在しています。それではアート（美術）支援はどこに位置するのかということになりますが、結論を言えば、個と社会の中間に位置していますね。このことがとても重要です。子どもは特に幼児期には自分と一体の表現をしますが、その表現に対して親や先生は社会的な視点から口出しをしますね。指導として修正を求める場合もありますね。ケースバイケースなので、一概にいけないとは言えません。それに対してアート支援はセラピストのように、子どもの表現すべてを受容し一緒に活動します。しかも親とも先生とも異なる、第三者の大人が子どもの表現を受け入れることで、子どもは安心します。肝心なのは大人であることで、子どもにとって大人は社会の側の人と位置づけますから。アート支援では、「従来の大人とはどうも違うようだ」と接近してきます。つまりアート支援は個と社会の中間に位置することになり、結果として被災者（こども）に寄り添う、アートが現れます。個と社会を取り持つ位置にアート支援があると考えますが、被災地では、一人でアート支援活動をする人、チームを組む人、作家の立場をとる人と活動は各個人の流儀に委ねられているのが実情です。

聞き手 三陸沿岸部の民俗伝承は今回の震災を機に、どのように変わったのでしょうか。

新妻 私の専門外なので大まかな感想となります。実は私の親戚は沿岸部に在って、家族全員が津波にのまれました。その集落も今は海に浸かったままで、地形が一変し後日、道なき道をやっとの思いでたどりつい時には、井戸らしき痕跡を見つけるだけでした。幼年時に親しんだ母屋や、囲炉裏・養蚕の匂い・桑畑・柿の木などの感触、そして一日中裸足で遊び呆けた早瀬の清流などは、津波ですべて消えました。あの当時の山河を思い出すと、喪失感は憧憬と重なりたまらなく大きいですね。今では住人が離散してしまい、継承された寄り合いや行事と言った民俗文化が途切れますね。半農半漁の地域でしたが、それだけに氏神様への信仰も篤く、年中行事に据えられていました。人が住めなくなると、何もかも変わり果ててしまいます。三陸地方は津波の襲来たびに、文化が寸断された歴史を持つと言われていますが、どのように復活するのでしょうか。

聞き手 アトリエ・コパンの復旧はどのようになっているのでしょうか。

新妻 コパンもヘドロで浸水しましたが、再開を望む子どもたちの声が届いて、6月に画材を新調しました。子どもたちにとっては「描く・作る」が日常となっていたので、その日常の回復を親も望んでいました。アトリエの清掃は子どもたちが自主的に買って出て、長靴と軍手のボランティア姿が頼もしく見えましたね。子どもたちの中には両親を亡くした子、母や父のいずれかを亡くした子、同居の親族、親友、それから我が家を

失った子どもたちも多く、どの子も被災と関わっています。それでも家族の理解によって元気に活動を続けています。コパンの活動はアート支援と近似していて、数年前の子どもが言った言葉を思い出しました。その子は新人に向かって、「ここでは自分の思ったようにやっついていいんだよ…習うところではないんだから」と。自分たちが受容されていて、私たちはファシリテーターの役どころなのでしょう。現在は、フラッシュバックして動揺を示す子どもも認められますが、それでも気心の知れた仲間たちと一緒に活動することで、ゆっくりと回復し、それは制作内容に現れています。アートによって緊張が解きほぐされ、アートによって自分に正直になり、アートによって自分が肯定され、自信をもち、アートによって人と繋がることができからでしょう。

聞き手 新妻先生ご自身はアート支援をなさらないのですか。

新妻 先日は、被災地である東松島市の小学校に参りました。被災後、半年以上が経過したことから、無理をお願いし「授業」をさせていただきました。「支援」の意味が私の中で今もなお曖昧であることから、私自身に目的を明確に課することから「授業」としました。学校側は「長い目で見れば、子どもたちに何か残るのでは」と快諾していただきました。校舎の1階は津波で浸水したため依然として使えず、3階の多目的教室を使って2クラス57名で造形活動をしました。紙で「魔除け」のお面をつくる、というワークショップでしたが、「かまど神」をイメージしていただければ分かりやすいと思います。この地方には大工さんや、左官職人が家屋の完成を記念して一抱えもあるお面を作り、大黒柱に飾る風習がありましたので、それをヒントにハサミと紙だけで作りました。簡単にそして探索的に作れる内容です。お面は自宅に飾れば「津波に負けない魔除けになる」の言葉が効いたのか、どの子もモチベーションが高まり熱心に取り組み、辛い共通体験があったためでしょうか、もっとバージョンアップさせたいと欲張りになっていましたね。

新妻健悦氏の紹介

立原慶一

新妻氏は昭和22年に生まれ、同48年3月に東京造形大学を卒業する。49年に石巻市に民間美術教育施設アトリエ・コパンを開設し、現在まで主宰者として運営してきた。昭和61年に宮城教育大学非常勤講師となり、その後現在まで、美術教育の講義及び演習を担当してきた。

「A言語・B言語」の概念及び、それを核とする新妻理論によって、美術に対する苦手意識を克服できるとの意見が多く寄せられるなど、美術教育界で注目されていた。それは宮城県美術館が平成8年に発行した『新妻健悦のワークショップ [美術探検・演習—子供と美術をめぐる—]』で披瀝された。

平成23年9月24日（土）に開かれた、第50回大学美術教育学会（於・宮城教育大

学) でシンポジウム「美術教育、ゼロからの出発」のパネリストを務め、ユニークな美術教育論は注目を集めた。同年 12 月 14 日～25 日には CCAA アートプラザ (旧新宿区立四谷第四小学校・東京都新宿区四谷 4-20) で『B 言語の世界—秘密を探す子どもたち—アトリエ・コパンの実践』展を開催する予定。